

アタッチメント、「甘え」、自分 —アタッチメントの文化研究における「甘え」の取り扱いに関する—考察

杉尾 浩規

1. はじめに

最近、精神分析家ボウルビィ (Bowlby, J.) と心理学者エインズワース (Ainsworth, M. D. S.) に始まるアタッチメント研究の普遍妥当性に対する問題提起の高まりが人類学や文化心理学を中心に活発化している (e.g., Keller 2007; Keller & Bard 2017, LeVine & LeVine 2016; Otto & Keller 2014, Quinn & Mageo 2013)。この研究動向は、アタッチメント理論が仮定する「敏感な (sensitive) 養育を特徴とする母子二者関係」→「子どもの自律性及び社会有能性の獲得」という発達経路の普遍性に異議を唱え、子ども (あるいはヒトとしての人間) のアタッチメント関係及び発達経路の文化特異性を強調する「アタッチメントの文化研究」である (杉尾 2018)。

本稿ではアタッチメントの文化研究の具体例として心理学者ロスバウムを中心とする土居健郎の「甘え」論に依拠した研究を検討する。土居「甘え」論はアタッチメントと文化を巡る議論において現在まで繰り返し参照されている (e.g., Behrens 2004, 2016; Gjerde 2001; Mesman et al. 2016; Rothbaum & Kakinuma 2004; Rothbaum, et al. 2007; Rothbaum, Pott, et al. 2000; Rothbaum, Weisz, et al. 2000, 2001; Tobin 2000; van IJzendoorn & Sagi-Schwartz 1999, 2008; Yamaguchi 2004)。その中でもロスバウムを中心とする土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究は、アタッチメント理論の普遍妥当性を批判するというアタッチメントの文化研究における研究動向を反映した特徴を有する。本稿では特にロスバウムを中心とするアタッチメントの文化研究が土居「甘え」論を日本におけるアタッチメント関係の文化特異性に関する理論として位置づけている点に注目したい。なぜなら土居自身は「甘え」論を日本の文化的価値観ではなく文化を超えた人間性に関する研究として位置づけているからである。それは例えば次の記述に示されている。「因みに私の甘え研究は甘えを概念としてとらえることから出発した。であるから、最初から甘えそれ自体をある一般的なものとして措定している。この点、他の研究者が甘えを特殊な日本的現象としてとらえるのと根本的に立場を異にしている」(土居 1999: 214 (注2))。これはロスバウムを中心とするアタッチメントの文化研究における土居「甘え」論の取り扱いを検討する必要性を示しているように思われる。

本稿の構成は以下の通りである。初めに2章と3章では、ロスバウムを主著者とする二つの論文 (Rothbaum, Weisz, et al. 2000; Rothbaum, Pott, et al. 2000) を整理し、土居「甘え」論がどのように取り扱われているのかを確認する。次に4章では、2章と3章の議論に基づきながら、ロスバウムらの土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究とアタッチメント研究の争点を明確にし、前者は後者に対する批判として位置づけられることを確認する。最後に5章では、特に「甘え」と「自分」という視点から、土居自身の「甘え」論とロスバウムらが依拠した土居「甘え」論を比較検討する。そしてロスバウムらによる土居「甘え」論の捉え方に問題を指摘し、加えて土居「甘え」論それ自体がアタッチメント理論との親和性を有する可能性を示す。このように、本稿の考察は、アタッチメントと文化を巡る議論全体における土居「甘え」論の取り扱いを網羅するのではなく、ロスバウムを中心とする土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究を焦点とすることを、予めお断りしておきたい。

2. アタッチメントと「甘え」①：アタッチメントの安定性と文化

アタッチメントとは (e.g., ボウルビィ 1991, 1993; Ainsworth et al. 1978)、个体保護 (物理的安全 (safety)) という進化論的起源を有する生物学的機能が仮定されたヒトとしての人間に普遍的な対象希求傾向である。个体発生においてこの傾向は他者との相互作用へと方向づけられた赤ん坊の学習能力における生得的バイアス (注視、リーチング、泣き、微笑など) として現れる。そしてこの生得的な学習バイアスは、養育者 (一般的には母親) を特定対象とした相互作用経験を通して、その人物への接触・近接及びそれらの維持を目標とした行動制御システムへと生後6ヶ月以降12ヶ月頃までに組織化することが仮定される。組織化の主要因は養育者の「感性 (sensitivity)」 (子どものアタッチメント欲求への敏感な応答) とされ、組織化は養育者に近づくアタッチメント行動と養育者から離れる探索行動のバランスとして捉えられる。子どもが探索行動に没頭し養育者と探索の結果を分かち合い探索行動を再開できることは、その子が養育者を必要などときにはいつでも逃げ込める「確実な避難所 (haven of safety)」としながら探索行動のための「安全基地 (secure base)」として活用していることを示し、アタッチメント行動と探索行動のバランスが保たれていることを意味する (e.g., Waters & Cummings 2000)。安全基地としての養育者の機能は「安心感 (felt security)」の提供であり、それは自己信頼 (self-reliance) とそれを育んだ養育者への信頼に裏打ちされた居心地の良さとされる (e.g., Ainsworth 2010)。アタッチメント行動と探索行動のバランスが保たれている安全基地現象は、養育者の安全基地機能が安定しているという意味で「アタッチメントの安定性 (security)」、つまりアタッチメントの行動制御システムの組織化が安定していることの反映になる。対して二つの行動のバランスの崩れは養育者の安全基地機能が安定していないという意味で「アタッチメントの不安定性 (insecurity)」を反映する。

アタッチメントの安定性／不安定性はアタッチメントの人為的活性化によりその組織化スタ

イルを顕在化させることを目的としたSSP (Strange Situation Procedure) によって評価される (e.g., Ainsworth et al. 1978)。SSPは、実験的環境において母親との分離や見知らぬ人との対面という「ほどよい (mild)」ストレス状況に置かれた赤ん坊が母親との再会場面で示す反応に基づき、アタッチメントの組織化スタイルを評価する。その評価は、A (回避型)、B (安定型)、C (アンビバレント型) の三分類から成る。SSPでの母親との再会場面でストレス制御が示されるBタイプは、アタッチメント行動と探索行動のバランスが保たれている「安定したアタッチメント」として分類され、アタッチメントの組織化スタイルの標準となる。対して母親との距離が過度であるAタイプはアタッチメント欲求に拒絶的な養育者への、至近距離で母親に怒りを伴う抵抗を示すCタイプはアタッチメント欲求に予測困難な応答をする養育者への、互いに異なる適応スタイルであり、共に二つの行動のバランスが崩れている「不安定なアタッチメント」として分類される。アタッチメントの安定性／不安定性を反映する安全基地現象は母親の安全基地機能が内在化し始めるにつれて次第に衰退する。そして内在化した母親の安全基地機能は自律性及び社会有能性の形成に影響を及ぼし、対象を変えながら愛情の絆の雛形として生涯にわたり継続することが仮定される。

ロスバウムら (Rothbaum, Weisz, et al. 2000) の論文「アタッチメントと文化——アメリカ合衆国と日本における安心 (security)」は、上に要約を示したアタッチメント理論における子どもの発達経路の普遍性に対して関連研究証左に依拠しながら異議を唱える。アタッチメント理論に従えば、「人間の赤ん坊は母親の敏感な養育による生得的アタッチメント欲求の充足経験を通してアタッチメントを安定化 (生得的アタッチメント欲求の自己制御化) させることにより自律性及び社会有能性を獲得する」という発達経路は普遍的である。対してロスバウムらは、アメリカの養育特徴に注目しながらこれを西洋における文化特異的な発達経路として提案する⁽¹⁾。その主張はアタッチメントの安定性の「前件 (敏感性)」、「後件 (有能性)」、「性質 (安全基地)」というアタッチメント理論が普遍性を仮定する三つ仮説の検証に基づく。検証作業はこれら三つの仮説に関するアメリカと日本の比較として展開され、その結果はアタッチメント理論における発達経路がアメリカの文化的価値観の反映であることを示す。対して日本における発達経路は「甘え」という日本の文化的価値観との関連で理解されなければならないことが主張される。以上の議論から、アタッチメントの安定性は文化特異的意味を有する養育経験に基づく構成物であるという視点が提案される。三つの仮説を巡る議論は以下の通りである。

一つ目の仮説に関する議論から見てみたい。アタッチメント理論は、敏感な養育が赤ん坊のアタッチメントを安定化させる主要因であるという「敏感性」仮説に普遍性を仮定する。対してロスバウムら (Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1096-1097) は、エインズワース (e.g., Ainsworth

(1) ロスバウムらが「西洋」という言葉で表現しているのは、アメリカ合衆国、カナダ、西欧諸国であり、特にアタッチメント研究が依拠するサンプルの源泉である主流の (白人の) 中流階級である (Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1093)。本章では、整理する論文の記述に従い「アメリカ」と表記する。

et al. 1978) がボルティモアの白人中流家庭の母子サンプルに基づいて定義した「感性」概念を「探索」と「自律」というアメリカにおける文化的価値観の反映として捉え直す。そのためにアメリカの養育では赤ん坊が自らの欲求として伝達するシグナルへの随伴的応答が重視される。対して日本の養育では赤ん坊の欲求への情動的に親密な先取りの応答に価値が置かれる。これは日本の養育の感性には「依存」と「情動的親密さ」という文化的価値観が反映されていることを示す。養育の感性における文化的違いはこのような応答スタイルに限定されるものではない。例えば母親の赤ん坊に対する語りの焦点はアメリカでは「情報」に日本では「情動」に置かれる傾向にあるという違いが認められる。あるいは母親の赤ん坊との関わり合いの違いがある。それはアメリカにおける距離を置いた (distal) アイ・コンタクトと日本における持続的な身体接触の対比として示される。他にも母親が赤ん坊の関心を向ける対象の違いがある。それはアメリカでは物理的対象に向けられるのに対して日本では社会的対象(その中心は母親)に向けられる傾向がある。アメリカと日本の赤ん坊は、このように互いに異なる文化的目標を有する敏感な養育経験によって、その目標へと方向づけられた欲求を喚起される。「日本の感性は赤ん坊の社会的関与に対する欲求に敏感であり、アメリカの感性は赤ん坊の個体化に対する欲求に敏感であると思われる」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1096-1097)。アタッチメント理論に従えば、赤ん坊は敏感な養育によるアタッチメント欲求の充足経験を通してアタッチメントを安定化させる。対してロスバウムらの主張は文化特異的に敏感な養育がそれによって充足される欲求を刺激することによりその欲求を喚起することを意味する。これはアタッチメント欲求が養育文化の多様性に応じて多様に安定化することを示唆する⁽²⁾。

次に二つ目の仮説に関する議論を見てみたい。アタッチメント理論は赤ん坊時代のアタッチメントの安定性が子ども時代と大人時代の社会有能性を予測するという「有能性」仮説に普遍性を仮定する。対してロスバウムら (Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1097-1099) は、アタッチメント理論における「有能性」概念が「個体化」と関連する行動特徴に基づき定義されていることに注目し、それを「感性」概念と同じくアメリカの文化的価値観の反映として捉え直す。個体化と関連する子ども時代の行動特徴は三つに分類される。一つ目の分類は「依存に対する過小評価」であり、探索、自律性、自尊心、エゴ・レジリエンスなどの行動特徴が含まれる。しかし日本においては「自らの欲求を満たしたり他の人々の欲求との間で調整したりする (例

(2) この文脈でロスバウムらは養育の感性がアタッチメント理論におけるアタッチメント欲求に敏感であるとは述べていない。しかし「文化特異的に敏感な養育がそれによって充足される欲求を刺激することによりその欲求を喚起する」という考えが成立するためには、文化特異的に敏感な養育によって喚起される欲求がアタッチメント欲求であること (あるいはそれに関係していること) が前提となる。さもなければロスバウムらの議論はアタッチメント理論とは無関係に文化特異的な養育が文化特異的な欲求を喚起することを主張しているに過ぎないことになるからである (この場合「感性」概念の普遍性を批判することにはならない)。この前提は、3章及び4章で指摘するように、ロスバウムらがアタッチメント欲求を関係形成傾向として捉えていることに起因すると思われる。

えば、社会適合や順応など) ための手段として他の人々に依存することは社会的調和という目標に必要不可欠であると見なされ、この目標は日本で高く評価されている」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1098)。二つ目の分類は「情動の開示性」であり、自己表現や感覚経験の制御 (affect regulation) などが含まれる。しかし日本においては「子どもは社会的調和を守るために敵対的感情を口に出さないことや間接的に表現することを推奨される」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1098)。それゆえ「もしも敵対的感情が[直接的に]表現されるならば、それは関係性が修復不可能であることを十中八九意味するだろう ([] 内引用者)」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1098)。三つ目の分類は「社交性」であり、向社会行動や友情などが含まれる。しかし日本においては「内集団と外集団のメンバーを区別することや見知らぬ人々を恐れて避けることを推奨される」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1098)。アタッチメント理論ではこれら三分類の行動特徴がアタッチメントの安定性を有する大人の有能性に対する普遍的指標ともされる。しかし日本においてはこれらの行動特徴の評価は低い。それはとりわけ独立に関して当てはまる。「日本では、依存(すなわち相互依存)、受容と献身、統合への望みが[アメリカ]よりも一般的であり有能性と関連しやすい ([] 内引用者)」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1099)。

最後に三つ目の仮説に関する議論を見てみたい。アタッチメント理論は、アタッチメントの安定性がアタッチメント行動と探索行動の結びつきとして概念化されるという「安全基地」仮説に普遍性を仮定する。対してロスバウムら (Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1099-1100) は「安全基地」概念を「敏感性」及び「有能性」概念と同じくアメリカの文化的価値観の反映として捉え直す。ロスバウムらはこれら二つの行動の結びつきに生物学的基盤を想定する点でアタッチメント理論に同意する。しかし同時にアタッチメント理論が両者の結びつきに仮定する普遍性を文化的価値観の反映に置き換える。「アタッチメント理論家による安全基地の概念化が反映しているのは、探索への西洋的強調と、探索が個体化——これは健全で肯定的結果と見なされている——に至るといふ信念である、というのが我々の主張である」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1099)。この際ロスバウムらは土居「甘え」論を自らの主張の論拠とする。そして、「赤ん坊が彼/彼女の母親を求めるときに感じるもの」(土居 1992: 7) であり「相手の愛に依存しそれをあてにしたり、その寛大さに浴したりすること」(土居 1992: 8) として一般化される「甘え」を「アタッチメントと依存の双方を伴う関係性」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1100) として捉える。ロスバウムらに従えば、アタッチメント理論と土居「甘え」論は子どもが養育者を安全基地としながら現実への適応を学ぶという発達経路を共有する。しかし適応する現実の文化的意味に応じてアタッチメント行動が主要な結びつきを形成する行動システムには違いがある。「アメリカ合衆国では主要な結びつきは探索との間にあり、適応は主に個体化と環境の自律的支配に関係する。日本では主要な結びつきは依存との間にあり、適応は主に順応、[関係性の] 喪失の回避、他者との調和、そして究極的には忠誠と相互依存に関係する」([] 内引用者) (Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1100)。アタッチメント行動と依存行動の結びつきである「甘え」は「日本におけるアタッチメントの関係性の典型」(Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1100) で

あり、それゆえ日本では安全基地も「甘え」として概念化される必要がある。

安全基地が日本では「甘え」として概念化されることはアタッチメント分類の普遍妥当性に対する異議申し立てとなる。アタッチメント理論に従えば、「アンビバレント型（Cタイプ）」はアタッチメントの行動制御システムの組織化が安定していないという意味で「アタッチメントの不安定性」を示す類型である。その一般的な行動特徴には、誇張されたキュートで赤ん坊のような行動、世話と関心に対する欲求の極端な表出、纏わりつくことと近接することを広範囲に求めること、どうしようもない依存、極端な受動性、自己と他者の境界を曖昧にすること、探索に没頭できないことなどが含まれる（Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1100）。ロスバウムらはこれらCタイプの行動特徴と日本で広く適応的とされる「甘え」の行動特徴における著しい類似に注意を促す。「これらのアンビバレント行動に関する特徴の多くは日本における正常な（普通の、normal）甘えの関係性を特徴づける」（Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1100）。しかし赤ん坊のアタッチメントをCタイプとして不安定化させる養育者の特徴（アタッチメント欲求に対する予測困難な応答性）を日本の養育者の一般的特徴と見なすことはできない（Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1100）。「甘え」の行動特徴は上で整理した日本における敏感な養育によって喚起された欲求に基づくのであり、逆に「アメリカ合衆国の親が日本の親によって価値づけられたやり方で自らの赤ん坊を世話するとき、彼らは鈍感と見なされ、赤ん坊は不安定にアタッチメントが形成されていることが見出される」（Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1097）。

3. アタッチメントと「甘え」②：発達と文化

ロスバウムら（Rothbaum, Pott, et al. 2000）の論文「日本とアメリカ合衆国における親密な関係の発達——共生的調和と生成的緊張という経路」は、前章で整理したアタッチメントの安定性を巡る議論と同じ立場から、親密な関係の発達経路に通常想定されている普遍性に対して関連研究証左に依拠しながら異議を唱える。そして日本とアメリカの比較を通して⁽³⁾、親密な関係の普遍的発達経路をアメリカの文化的価値観の反映として捉え直す。アメリカの文化的価値観は「個体化」として示され、その行動特徴には、自律性、表現力（直接的で言語的なコミュニケーション能力）、探索などが含まれる。対して日本における親密な関係の発達経路が反映する文化的価値観は「順応」として示され、その行動特徴には、共感、従順、礼儀正しさなどが含まれる。二つの文化的価値観の違いは「関係性」という枠組みの中で評価される。ただしその評価は関係性の「度合い」に基づくものではない。つまりアメリカにおける個体化と日本

(3) ロスバウムら（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1121）は、親密な関係を「愛、忠誠、世話、コミットメントを伴う対人関係の結びつき」として定義し、その典型として、親子、近親者、親友、性的パートナーにおける関係を位置づけている。また、ロスバウムらが依拠した実証研究におけるサンプルの源泉は1960-1990年代の日本とアメリカにおける都市部の中流階級であり、本章で整理する議論は前章での議論と連続性を想定することができると思われる。

における順応への価値付与は関係性の「軽視」と「重視」を意味するのではない。評価は関係の「度合い」ではなく「意味の違い」に基づく。「関係の重要性と強度における文化的違いから関係の意味とダイナミクスにおける文化的違いへと我々は焦点を移したいと思う。とりわけ強調点は個体化による関係の力の弱め方というよりも個体化と順応による関係の性質への影響の及ぼし方にある」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123)。

ロスバウムら (Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123) はアタッチメント理論における生得的な対象希求傾向をモデルとした生物学的起源を有する関係形成傾向を仮定する。これにより発達と文化の関係は、文化的価値観が学習経験を通して内在化するプロセスではなく、生得的な関係形成傾向が「文化的レンズ (cultural lenses)」を通して文化的パターンになるプロセスとして捉えられる。順応という文化的レンズが支配的な日本では「他者の欲求に適合するよう自己を変化させる継続的な牽引力」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123) を特徴とする「共生的調和」がパターンとなる。共生的調和は「日本の母親の極端な寛大さと子どもの母親への「甘え」—完全な依存—」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123) を原型とし、「後の子ども時代と大人時代の甘えに基づく相互依存関係にも同様に見られる」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123)。また、その調和が共生的である理由は「調和の基礎が、明瞭に区別された役割を伴う人と人との間での極めて親密で相互に有益な結びつきにある」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123) からとされる。対して個体化という文化的レンズが支配的なアメリカでは「一方で主要なアタッチメント対象である他者との近接と親密さを求める欲望と、他方で分離と新しい関係を含む周囲の世界の探索を求める欲望との、継続的な綱引き」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123) を特徴とする「生成的緊張」がパターンとなる。生成的緊張は「一方で養育者との近接と接触、他方で養育者からの分離と環境の探索という、アタッチメントが安定している (securely attached) アメリカ合衆国の赤ん坊の競合する欲望」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123) を原型とし、生涯にわたり対立的な目標を持つ対人関係での「目標修正的な相互関係にも同様に見られる」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123)。また、その緊張が生成的な理由は「緊張が個人の社会的発達を促進する」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1123) からとされる。

ロスバウムらは日本とアメリカにおける親密な関係を四段階の生涯発達としてモデル化する。一つ目の段階は誕生から2歳までの赤ん坊時代 (Infancy) であり、親密な関係の特徴は「統合 (Union)」(日本) と「再統合 (Reunion)」(アメリカ) となる。二つ目の段階は2歳から12歳までの子ども時代 (Childhood) であり、親密な関係の特徴は「他者の期待 (Other's Expectations)」(日本) と「個人的好み (Personal Preferences)」(アメリカ) となる。三つ目の段階は13歳からの10代を含む青年時代 (Adolescence) であり、親密な関係の特徴は「安定性 (Stability)」(日本) と「移動性 (Transferability)」(アメリカ) となる。四つ目の段階は20歳以上の大人時代 (Adulthood) であり、親密な関係の特徴は「保証 (Assurance)」(日本) と「信頼 (Trust)」(アメリカ) となる。日本とアメリカではこれら各段階における親密な関係の形成を通して「共生的調和」と「生成的緊張」という文化的パターンが経験されることになる。

ただし、既に述べた通り、この経験が意味するのは生物学的な関係形成傾向の文化的パターン化である。つまり「共生的調和」（日本）と「生成的緊張」（アメリカ）は生得的な関係形成傾向を共有すると同時に互いに異なる文化的レンズを持つ（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126）。以下では日本とアメリカにおける親密な関係に関する四段階の生涯発達モデルを整理する。

第一段階である赤ん坊時代における親密な関係の発達は「少なくとも一人の主要な養育者、通常は母親との安定した関係（a secure relationship）を発達させること」（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126）を普遍的課題とする。ここで「安定した関係」が意味するのは「安心（security）」を得ることができる他者との関係であり、赤ん坊が母親と安定した関係を形成する点において日本とアメリカは同じである。しかし赤ん坊が母親から得る安心には養育に反映された文化的違いが存在する（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126-1128）。日本の場合「赤ん坊は自らの欲求に対する母親の寛大さから安心を引き出す」（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126）。つまり赤ん坊の安心は自らの欲求が寛大な母親に満たされることの中にある。これは日本の養育が母子関係を「統合」として焦点化することを意味する。日本の「養育技法は子どもをほとんど恒常的な母親との統合へと向かわせる。日本の母親は表出される以前に赤ん坊の欲求を満たし、それによって自己と他者の区別を曖昧にする」（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126）。例えば母親は赤ん坊の関心を自分自身に向けてことで赤ん坊の自らへの順応を促進させる。あるいは玩具のような外界の対象に赤ん坊の関心を向ける際にも強調点は共感に置かれる（「そんなことしたらお人形さんが泣いちゃうわよ」など）。このような母親の養育実践は「親子の統合や、甘えすなわち赤ん坊が母親は自分の欲求全てを満たすだろうとあてにすることを、強化する」（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126）。日本では、母親は赤ん坊の欲求を先取りして満たし、赤ん坊は母親に満たされて安心することを自らの欲求の満足として経験する。その結果、赤ん坊は安心を得るために母親に依存することになる。これは母親が赤ん坊の依存欲求を喚起することを意味すると言えるだろう。

対して、アメリカの場合「母親の養育は、子どもの安心の欲求を満たすと同時に外界への方向づけを促進する」（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126）。つまり赤ん坊の安心は自らの安心の欲求が母親に満たされることの中にある。しかし同時に母親は赤ん坊に分離を求める。これはアメリカの養育が母子関係を「再統合」として焦点化することを意味する。「この緊張は分離と再統合という現象において特に明白である。その際に子どもは、分離と探索の基地として養育者を使うことと安心を取り戻すために養育者と再統合することを繰り返す」（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126）。例えば母親は赤ん坊の関心を自分自身から外界へと切り替えることで赤ん坊の外界への探索を促進させる。あるいは玩具のような外界の対象に赤ん坊の関心を向ける際にも強調点は玩具自体への関心の喚起に置かれる。このような養育実践を通して母親は「赤ん坊を環境へと方向づけ、赤ん坊がそこから分離して世界を探索することができる基地としての役割を果たす」（Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1126）。アメリカでは、母親は赤ん坊に安心を与えると同時に探索を求め、赤ん坊は安心と探索のバランスを経験することを通して自律性を獲得す

る。以上のように整理された日本とアメリカにおける赤ん坊時代の親密な関係は、前章で整理した日本とアメリカにおける「安定したアタッチメント関係」と照応する。そして、赤ん坊時代の親密な関係がその生涯発達における文化的経路の原型とされていることは、赤ん坊時代に形成された安定したアタッチメント関係の生涯にわたる影響力が仮定されていることを示していると言えるだろう。

第二段階である子ども時代における親密な関係の発達には「拡大する社会環境という文脈の中で親子関係を促進する技術を学ぶこと」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1128)を普遍的課題とする。つまり子どもが家庭内の親子関係を家庭外の対人関係一般の雛形として形成することを目的とした社会化の段階である。日本の養育では「他者の期待」を満たすことの重要性が強調され、「非言語的で相互に共感的な親子の相互作用が目立つ」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1129)。この相互作用は子どもが「私の期待は親に満たされる」という経験を持つことによって成立し、非言語的な欲求の「満たされ満たす」経験の場が家庭(親子関係)という「ウチ」となる。そして子どもはこの経験を「ソト」での対人関係一般において繰り返すことを期待される。それゆえ親子関係における特に母親への子どもの依存は「健全な依存」とされ、「日本の母親はアメリカの母親と比較して未就学児の甘え(依存的)行動をより受け入れ促しさえしている」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1130)。対してアメリカの養育では「個人的好み」を主張することの重要性が強調され、「言語的表出性は子どものアタッチメントの安定性に関する基準として使われてきたほどアメリカ合衆国における親密な関係の要である」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1129)。これは自らの欲求を満たすためにはそれを言葉にして主張しなければならないことを意味する。しかしそのためには他者の「個人的好み」との対立に折り合いをつけることが必要となる。親が子どもの自己主張を受け入れると同時に自らの自己主張によって子どもに限度を学ばせることは、「子どもの自律性をそして究極的には互いに異なる個人間での親密な関係を促進するものと見なされる」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1129)。それゆえ親子関係における子どもの親への反抗は「健全な対立」とされ、「社会化の目標は対立を取り除くというよりもむしろ機能的にすることである」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1129)。

第三段階である青年時代における親密な関係の発達は「仲間と親密な関係を築くこと」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1131)を普遍的課題とする。日本では親密な親子関係が仲間関係に持ち込まれ二つの関係の「安定性」と継続性が重視される。10代の若者が経験する両関係における「他者の期待」には連続性があるために、「彼らが両方の期待を満たすことは[アメリカの10代の若者]より容易である([]内引用者)」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1132)。また彼らの対人関係の中心は親子関係にあり「甘え関係が強力であり続けている」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1132)ことがその理由の一つとされる。対してアメリカでは親子関係から独立して親密な関係を仲間関係に「移動」させることが重視される。10代の若者が経験する二つの関係における「他者の期待」は特にセクシャリティを巡り対立的となる。彼らは性的な魅力の中に安心(security)を求め、「セクシャルではない関係、特に親との関係の中で依存欲求に

身を任せることは未熟さや心理学的な意味における退行の兆候であるとしばしば見なされる」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1132)。最後に、第四段階である大人時代の親密な関係の発達には「配偶者関係を形成し家族の次世代を創ること」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1132)を普遍的課題とする。日本の配偶者関係は社会ネットワークの「保証」に基づく継続性を特徴とする。重視されるのは相手の社会的履歴や互いが属する集団同士の関係性であり、「伝統的に日本の家族は配偶者選択に相当の影響力を及ぼしてきたしその影響の名残は現在も続く」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1133)。配偶者関係は非言語的コミュニケーションに支えられた「一体感」として維持され、自らが埋め込まれている社会ネットワークとの関係にも同じことが期待される。「日本では、成熟は一体感——自己とその親密な他者の境界を取り払うこと——に至ることが期待される」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1135)。対して自らに対する相手の愛への「信頼」に基づくアメリカの配偶者関係は社会ネットワークが保証する継続性を欠いた変わりやすさを特徴とする。重視されるのは自らの選択であり、「アメリカ合衆国では人格的魅力が配偶者関係を決定づけることが期待されている」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1133)。その関係は言語的コミュニケーションに支えられた愛の結びつきとして維持される。「アメリカ合衆国では、他者に関する確信が読心術に基づくならば、それは成熟よりも心理学的な意味における退行や病理の兆候と見なされやすい」(Rothbaum, Pott, et al. 2000: 1135)。

4. アタッチメントと「甘え」③：争点

以上、ロスバウムを主著者とする二つの論文の概要を示した。二つの論文の議論は密接に関連しながら全体としてアタッチメント研究批判を展開している。2章で整理した「アタッチメントの安定性」を巡る議論ではアタッチメント理論における「養育の敏感性」「社会有能性」「安全基地」という三つの概念の中にアメリカ(西洋)的な文化的バイアスが指摘された。この議論に従えばアタッチメントの安定性は文化特異的に構成されることになる。その際土居「甘え」論は日本におけるアタッチメントの安定性を意味するものとしてその主張の論拠とされた。「個体化(個人の自律)」に価値を置くアメリカではアタッチメント行動と探索行動の結びつきとして安定したアタッチメント関係が表現される。対して「順応(社会の調和)」に価値を置く日本ではアタッチメント行動と依存行動の結びつきとして「甘え(安定したアタッチメント)」関係が表現される。次の3章で整理した親密な関係を巡る議論では安定したアタッチメント関係を雛形とする親密な関係の生涯発達に関する文化的経路がモデル化された。アメリカにおける親密な関係の文化的パターンはアタッチメント行動と探索行動が結びついた「再統合(安定したアタッチメント関係)」を雛形とする「生成的緊張」として示される。対して日本における親密な関係の文化的パターンはアタッチメント行動と依存行動が結びついた「統合(「甘え」関係)」を雛形とする「共生的調和」として示される。ロスバウムらの議論は多様な養育文化環境を視野に入れたアタッチメントの安定性に関する比較文化研究として発展

した (e.g., Morelli & Rothbaum 2007; Rothbaum & Morelli 2005; Rothbaum et al. 2011; Rothbaum & Trommsdorff 2007)。しかしその基本的立場は上記二論文で示されている土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究である。

一見すると二つの論文はアタッチメントの安定性が文化構成物であると主張しているように思われる。2章の議論に従えば、アタッチメントの安定性は赤ん坊が養育経験を通して内在化した文化的価値観を反映する。更に3章の議論に従えば、養育経験に基づく安定したアタッチメント関係は親密な関係のテンプレートとして生涯にわたり影響を及ぼす。しかしロスバウムらの強調点は文化それ自体にあるのではなく文化と生物学の「混ざり合い」にある (e.g., Rothbaum, Weisz, et al. 2000; Rothbaum & Morelli 2005; Rothbaum et al. 2011)。つまりアタッチメントの安定性は文化と生物学の混合物として構成されるという主張である。これは現実のアタッチメント関係を「普遍的な生物学的傾向としてのアタッチメント」と「文化的コンテキスト」の混合物として捉えることを意味する。「文化と生物学は分離できないし融合しているというのが我々の主張である。アタッチメント研究は常に特定の文化的コンテキストに気を配るべきであると思われる。ごく最近までこれは事実ではなかった——アタッチメントの比較文化研究の焦点は圧倒的に理論の普遍性を与えることに置かれてきたからである。現在、文化的変異は理論上認められているが、調査の焦点ではない」(Rothbaum & Morelli 2005: 101)。そしてこの立場に従うならば「アタッチメントが発達する生物学的傾向とこれらのアタッチメントが生じる現実的環境が混ざり合う多種多様なあり方をよりよく理解すること」(Rothbaum & Morelli 2005: 101)が研究の目的となる。土居「甘え」論はこの意味においてアタッチメントの文化研究におけるモデル・ケースとして位置づけられた。ロスバウムらに従えば、「順応(社会の調和)」に価値を置く日本の親密な関係は相互依存関係として営まれる傾向にあり、このような対人関係の文化的パターンは赤ん坊時代に敏感な養育経験を通して構成された「甘え」関係という「混合物」として表現される。

「我々の仕事の大半が意図してきたのは、どれほどアタッチメント関係がアメリカ合衆国で一般的な自律の目標と日本で一般的な調和の目標に基礎づけられているのかを示すことである。我々が文化を比較する理由はアタッチメント関係の生物学的あるいは進化論的の支えを問題にするためではない。むしろどのようにして生物学的プロセスと文化的プロセスが相互に関係して様々なアタッチメント経験を促進するのかを理解しようとしているのである。文化研究は、アタッチメントのプロセスが自らの埋め込まれているコンテキストによって形成されるあり方と、そこから意味を引き出すあり方を、明らかにすることができる。そのような研究は西洋で開発された理論のみに頼ることはできない。例えば日本における「甘え」論のようなアタッチメントに関する現地の理論が考察されなければならない」(Rothbaum et al. 2011: 178)。

そうすると、ロスバウムらの文化研究とアタッチメント研究はどのような点で異なるのだろうか。前者は、文化と生物学の混合物である現実のアタッチメント関係を、例えば、日本では「甘え」関係というように、そのままの姿で示す。対して、後者は、現実の混合物から生物学的次元を抽出することで、アタッチメント理論の普遍妥当性を検証する。このような違いなのだろうか。そしてもしもそうであるならば、前者は後者の批判となりうるのだろうか。つまり両者に対立点は存在するのだろうか。なぜなら両者は相補的にアタッチメントと文化の理解に貢献すると思われるからである。しかしここでは「アタッチメントの安定性」と「社会化」の関係という点から両者の対立点を明確にしたい。ロスバウムらに従えば、アタッチメントの安定性は養育経験を通して学習した文化的価値観に応じて多様に表現される。つまりアタッチメントの安定性は文化環境への適応を目的とした社会化によって形成される。これは、アタッチメントの安定性をもたらす心的状態である安心感が、適応する文化環境に応じて多様に形成されることを意味する。対してアタッチメント理論に従えば、アタッチメントの安定性は社会化のプラットフォームであり、前者は後者から独立してそのプロセスに影響を及ぼす (e.g., Posada & Jacobs 2001)。

例えばアタッチメント研究者メイン (Main 1990) によれば、アタッチメントの安定性／不安定性は自らの置かれた文化特異的な養育環境における「条件つき戦略」であり、生物学的には等しい適応価を有する。しかし条件つき戦略は心理学的な意味において「一次的な条件つき戦略」と「二次的な条件つき戦略」に区別される。一次的戦略はアタッチメント欲求の自己制御が可能な自律性を有する適応戦略 (Bタイプ) であるのに対して、二次的戦略はそれが適応的でない場合の制御を目的とした追加戦略である。回避型 (Aタイプ) は養育者から関心をそらすことで、アンビバレント型 (Cタイプ) は養育者へ関心を集中させることで、一次的戦略を修正する二次的戦略とされる (Main 1990: 56-58)。メインの議論はアタッチメントの安定性／不安定性が環境への適応という意味では全て「安心感 (felt security)」を有することを示している。しかし、安定型の一次的戦略が自律的適応であるのに対して、追加の二次的戦略が含まれる不安定型は「感じられない不安 (unfelt insecurity)」を伴う (Ainsworth 1990: 479-480)。そのため、「この安心 [不安定型が感じる安心] は、状況に応じて不安に変わる可能性がある頼りにならない安心であり、あるいはその脆さのために時に強烈なストレス状態においては完全に崩壊する ([] 内引用者)」 (Ainsworth 1990: 479)。このように、アタッチメント理論の立場に立つならば、アタッチメントの安定性／不安定性は文化環境への適応を意味する社会化によって形成されるのではない。つまり社会化の成功により文化的パターンに従った対人関係の円滑な営みから安心を感じることは、それ自体がアタッチメントの安定性を意味するのではない。対してロスバウムらはアタッチメントの安定性を文化環境への適応を目的とした社会化によって形成される安心感として捉えている。ここには二次的戦略という視点が伴われていないと言えるだろう。この違いは、アタッチメント理論が仮定する普遍的傾向がアタッチメント欲求であるのに対して、ロスバウムらは普遍的な関係形成傾向を仮定しているという違いに起因すると思われる。「普遍的なものは特定のやり方で特定のコンテキストにおいてアタッチメ

ントを形成するようになるポテンシャルであるというのが我々の提案である」(Rothbaum et al. 2011: 156)。この場合、強調点はアタッチメント関係の形成に置かれ、形成されたアタッチメント関係の中で欲求としてのアタッチメントが満たされているかどうかは問われない。別のところで筆者(杉尾 2018)はアタッチメントの文化研究における一般的特徴を「人間の生得的な学習経験能力に基づくアタッチメントの文化的可塑性の強調」として指摘した。ロスバウムらの文化研究はこのようなアタッチメントの文化研究の一般的特徴を共有していると思われる。

アタッチメントの安定性と社会化の関係をどう捉えるのかを巡る両者の違いは、親子関係の捉え方の違いとして整理することができる。エインズワース (e.g., Ainsworth 1990, 1991) は、関係性を性質の異なる相互作用から構成された全体性として捉える比較行動学者ハインド (e.g., Hinde 1976) に従い、アタッチメントが親子関係それ自体ではなくその関係を構成する相互作用の一つに関わることを強調する。「親が子どもとの相互作用で演じる最も顕著な役割は保護と世話を与える養育者の役割であるが、親は、同じくこの関係を定義する他の相互作用で、例えば遊び仲間や教師やしつけに厳しい人などの他の役割を演じるかもしれない。アタッチメント理論に従えば、その関係のアタッチメント構成要素は養育者としての親との相互作用によって最も影響されるであろう。しかしこの構成要素はその関係の一部を構成するに過ぎない」(e.g., Ainsworth 1990: 474)。つまり、親子関係において、子どものアタッチメントの安定化は養育者としての親との相互作用に関わり、子どもの社会化はしつけをする人としての親との相互作用に関わる。そしてこの際、アタッチメントを巡る相互作用に起因する子どものアタッチメントの安定性は、社会化への学習バイアスとして親との相互作用を促進させることが仮定される (e.g., Richters & Waters 1991; Waters et al. 1986; Waters et al. 1991)。アタッチメント理論に従えば、社会化が成功し対人関係を円滑に営むことそれ自体がアタッチメントの安定性を意味するのでないことは既に述べた通りである。加えて、アタッチメントの安定性それ自体が社会化の成功を意味するのでもないことになる。社会化は「社会化への学習バイアスを備えた子ども」が「しつけをする人としての親」との相互作用を通して成し遂げられるのであり、「赤ん坊の頃にしっかりと抱きしめてアタッチメント欲求を十分満たしてあげれば、将来その子は社会適応能力を備えた立派な大人に成長する」という保証をアタッチメント理論は与えない。対してロスバウムらに従えば、アタッチメントの安定性は、社会化への学習バイアスではなく、それ自体が既に社会化の反映である。そのため、子どもが母親(養育者)を安全基地としながら自律的な探索行動を営むことは、「個体化(個人の自律)」というアメリカにおける文化的価値観の内面化が成功したことを示す。アタッチメント理論は「安全基地現象における探索行動」と「文化的価値観の内容における探索行動」を区別するのに対して (e.g., Kondo-Ikemura 2001)、ロスバウムらは「安全基地現象における探索行動」を「文化的価値観の内容における探索行動」の反映として捉えていると言えるだろう。ロスバウムらが一貫して「アタッチメントの安定性」ではなく「アタッチメント関係の安定性」という表現を使用する意図は社会化をコンテキストとした親子関係の強調にあるように思われる。

以上、本章ではアタッチメント研究とロスバウムらによる土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究の違いをどのように評価すべきか検討した。その結果、両者はアタッチメントの安定性と社会化の関係を巡り対立点を有することが示された。この対立は「アタッチメントの安定性を文化と生物学の混合物として捉え、ロスバウムらは文化的側面を強調するのに対してアタッチメント研究は生物学的側面を強調する」という違いとは異質である。この意味においてロスバウムらの文化研究をアタッチメント研究に対する批判として位置づけることができると思われる。

5. 考察：「甘え」と「自分」

2章と3章ではロスバウムを主著者とする二つの論文に注目し、土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究の概要を示した。続く4章では、ロスバウムらの文化研究とアタッチメント研究の対立点を明確化し前者を後者に対する批判として位置づけた。しかし本稿の関心はロスバウムらの文化研究がアタッチメント理論の普遍妥当性を批判する際に依拠した土居「甘え」論にある。より具体的に表現するならば、その土居「甘え」論への依拠の仕方にここでは注目したい。ロスバウムらに従えば、土居「甘え」論は日本における文化特異的なアタッチメント理論であり、「甘え」は安定したアタッチメント関係の日本における文化的表現である。だからこそ土居「甘え」論はアタッチメントの文化研究におけるモデル・ケースとされた。しかし、筆者の問題提起として冒頭で指摘した通り、土居は「甘え」を日本の文化的価値観の本質それ自体を表現する言葉ではなく文化を超えた人間性に関わる概念として位置づけている。これは、ロスバウムらによる土居「甘え」論の捉え方を検討する必要性を示しているように思われる。しかしロスバウムらは自らの議論の拠り所である土居「甘え」論に関する体系的記述を与えていない。彼らは初めから土居「甘え」論を使ってアタッチメント理論の普遍妥当性を批判しているからである。そこで本章では初めに土居「甘え」論の概要を示す。そして次にロスバウムらによる土居「甘え」論の捉え方を検討してみたい。土居「甘え」論をアタッチメント理論に対する批判として位置づけることは妥当なのだろうか。むしろ土居「甘え」論はアタッチメント理論と親和性が高いということはないのだろうか。以下ではこれらに関して検討を試みたい。

土居「甘え」論の概要

『「甘え」の構造』（土居 1971）1章で述べられているように「甘え」論の起源は土居が1950年代における二度のアメリカ留学で経験した「カルチャー・ショック」に由来する。土居は自らのカルチャー・ショック経験をアメリカにおける「「甘え」の受容の欠如」（土居 1999: 215）として理解するに至った。それは「私がアメリカで期待しても得られなかったものは「甘え」

に対する感受性であること」(土居 1999: 214-215) への気づきである。「甘え」論の起源が土居の異文化経験にあることはその文化研究としての可能性を示唆しているように思われる。しかしその可能性は「甘えることに寛容な日本の文化的価値観がアメリカにはなかった」というような文化の相対性という視点にあるのではない。重要なのは土居 (e.g., 1958, 1960a, 1960b, 1961, 1965, 1970, 1989, 1993) が臨床経験に基づきながら「甘え」という日本語を精神分析理論によって概念化し人間に普遍的な欲求として捉えた点にある。

「甘え」とは「人間関係において相手の好意をあてにして振る舞うこと」(土居 2001: 65) とされる。土居が思い描く「甘え」の原型は母親(保護と世話を与えてくれる特定他者)に近づこうとするいまだ言葉を話すことができない赤ん坊であり、それは例えば我々がこのような様子を見て「ああ、この子はお母さんに甘えているな」と思ったり述べたりするときの「甘え」である。「甘え」が相手の好意をあてにした振る舞いであるならば、その充足には甘えさせてくれる相手が必要不可欠となる。この意味で「甘え」は相手あつての依存欲求であり、土居はこれを「愛されたい欲求」と呼んだ。「甘え」の最大の特徴は非反省的・非言語的なことにある。つまり、意識された途端、たとえ言語化されなくても、それはもはや本来の「甘え」ではない。このため「この子は甘えている」「君は甘えている」と思い述べることはできても「私は甘えている」と一人称現在形で意識し表現することはできない。しかし対人関係の文化的価値づけに応じて非反省的・非言語的な「愛されたい欲求」である「甘え」への感受性に違いが生まれる。相互依存的な対人関係に価値を置く傾向が見られる日本では他者を求める動きが意識されやすい。対して相互独立的な対人関係に価値を置く傾向が見られる欧米では愛の欲求と言えば「愛されたい欲求」ではなく「愛する欲求」のことである。日本では「甘え」に関連する言葉が豊富にあるのとは対照的に欧米諸言語に「甘え」に相当する言葉がないという事実はこのためであると土居は述べる。しかしたとえ「甘え」という言葉がなくても「甘え」欲求は存在する。これが「英語のような言語が「甘え」のような言葉がなくてもやりくりできる」(土居 1992: 9) こと理由とされる。

土居 (e.g., 1970: 45-49) は「甘え」という「愛されたい欲求」を生得的な対象希求傾向として仮定する。この対象希求傾向としての「甘え」は、母親を別の存在として知覚する生後一年の後半頃から、赤ん坊が母親を求める動きとして現象化する⁽⁴⁾。「すなわち母親が自分と別の存在であり、したがって自分から離れることを体験するが故に、一層母親と結びついて離れまいとするのが甘えである。このように甘えの現象は不満の体験を契機として生まれ、相手との一体感を求めようとする感情のあらわれである」(土居 1970: 55)。ただし相手との一体感を求める「愛されたい欲求」としての「甘え」現象は愛されることを能動的に求める「自律の萌芽」(土

(4) 対象希求傾向としての「甘え」は突然に現象化するのではなく、それ以前の相互作用の蓄積に基づき展開することが仮定されている。「母親が子供の甘えについてはっきり手答えを感じる前に、その前段階が静かに進行していると考えerほうが正しい」(土居 2001: 92)。

居 1970: 56) でもある。なぜなら「たとえ他に依存することであっても、それが主体の欲求を示す限り、自律的であるといい得るからである」(土居 1970: 56)。赤ん坊は安定した母親の保護と世話によって「甘え」が満たされることにより「甘えられる」ことを経験する。「というのは相手が自分の方を向いて受け入れてくれているということではじめて甘えられるからである。「それでいいんだよ」と無言の中にこちらを暖かく見守ってくれていると感ずることで甘えが成立するのである」(土居 2001: 94)。やがて赤ん坊は、「母親からしばらく離れることに耐えることを学ぶに至った際」(土居 1970: 55)、母親はたとえ今は離れているとしても保護と世話を与えてくれるであろうことを、つまり母親は見守り続けてくれるであろうことを信頼するようになる。これにより「乳児は単に母親に甘えるだけでなく、母親を信頼するようになる」(土居 1970: 55)。赤ん坊は母親の見守りへの信頼に支えられて「甘え」欲求の挫折をそれとして保持することができるようになり始めると言えるだろう。そして母親もまた赤ん坊が持ちこたえられるであろうことを信頼するようになる。土居 (e.g., 1989) はこのような相互信頼関係に支えられた「甘え」を素直な (primitive) 「甘え」(あるいは、いい「甘え」) として位置づけた。

土居 (2001: 111-112) は赤ん坊時代の相互信頼に根ざした素直な「甘え」の心的効果として「落ち着く」という表現に注目する。それは対人関係の中で自分の居場所を持つことから得られる安心感であり、「母の懐に憩う幼子」(土居 2001: 112) を原型とする。「落ち着く」というのは、自分の居場所にそれこそ落ち着いて安心するという意味である。ではなぜそれが安心かという、そのような居場所は自他ともに認めるところだからである。言い換えれば、落ち着くのは当の個人が安心できる人間関係の中に身をおいていることを暗示する」(土居 2001: 111-112)。あるいは落ち着く場所が対人関係ではなく個人の中にある場合、その人は「落ち着いた人」と呼ばれる。「このような人は身近なところに甘える対象がなくても、精神内界に甘える対象を持っているので、どこに居ても落ち着いた状態を維持できると考えられるのである」(土居 2001: 112)。「やすらぎ」も「落ち着く」と同様に素直な「甘え」の心的効果の表現とされる(土居 1990b)。「やすらぎ」の根底には「自分が好きである」という気分がある。この気分は心の地として内在化した赤ん坊時代の素直な「甘え」経験に由来し、「ひとりのときにやすらぎが起こるのは、その際にいわば心の地が出るからである。また、誰か好きな人、馴染みのある者と一緒にいるときにやすらぐことが多いのは、そのことが幼い時代の幸福を再現するからであると考えられるのである」(土居 1990b: 41)。素直な「甘え」経験に由来する「自分が好きである」という心の状態は、赤ん坊時代に「甘え」欲求の挫折を持ちこたえるであろうと母親から信頼された自己に対する愛(自己愛)に由来する。「健康な自己愛は依存欲求の真の満足ないしその克服を契機として生ずる。それは低い段階での依存の満足に留まらず、したがって単なる甘えを超えて信頼の中に自分は愛されているという確信を持つことである。実際、人は他から愛されることによって初めて愛すべき自己を発見し、またその結果そのような自己を自らも愛するようになる」と考えられる」(土居 1970: 62)。

他方、赤ん坊時代に甘えさせてくれる確かな受け手がない場合の「甘え」は、素直な「甘

え」における相互信頼の関係性を欠くために対人関係に囚われ続ける。土居 (e.g., 1989) はこのような「甘え」を屈折した (convoluted) 「甘え」(あるいは、わるい「甘え」)として位置づけた。屈折した「甘え」は「甘えたいのに甘えられない」という「甘え」欲求の挫折に由来する一方的な要求の形をとった自己愛的「甘え」であり、素直な「甘え」と対照的に「甘えたい」「甘えられない」などのように一人称現在形で意識することもそれを言語化することも可能となる⁽⁵⁾。その特徴は「自分が周囲の関心を常に引き周囲によって盛り立てられたいと内心感じているながら、したがってその意味では周囲に依存しているにも拘わらず、自分では依存しているとは毛頭思わない」(土居 2002: 1019) ことにある。このような人物は一見すると自立しているように見える。しかし自らの自立のために他者を巻き込むという点で要求がましいいうささがあり、それは「一種の精神的弱みを表現している」(土居 2001: 99)。屈折した「甘え」は「甘えたいのに甘えられないから恨む」という意味で「恨み」と紙一重の関係にある(土居 2001: 94-97)。「とりいる」「てれる」「こだわる」などは「甘えたい」という側面が、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」などは「恨み」という側面が、それぞれ強調された「甘え」の語彙となる (e.g., 土居 1975)。「恨み」は「甘え」と対立ではなく併存の関係にある。恨むことで甘えているからである。土居 (e.g., 1970: 66-68, 2001: 94-97) はこのような「甘え」と「恨み」の同時存在を精神分析の概念である「アンビバレンス」の原型として位置づける。他方「甘え」と対立するのは「妬み」とされる (e.g., 土居 2001: 102-107)。

土居は、素直な「甘え」に由来する自己愛の経験を、独立した自己としての「自分がある」という経験として位置づける。対して屈折した「甘え」としての一方的な自己愛的要求を通して愛されている自己は関係性に囚われた「ナルシズム的自己」であり、この自己経験を「自分がない」という経験として位置づける。「自己の発見は、甘えられないという苦い体験を契機としておきることもあるが、もしそれだけで愛と信頼を体験しないならば、そのような自己はナルチズム的自己となる。すなわちそれはしばしば「自分がない」という意味での自己体験であり、自己を愛するというよりも自己に執着することであり、自己に執着する一方、他方では自己を嫌悪する自己分裂の状態なのである」(土居 1975: 62)。たとえ「ナルシズム的自己」が「自己愛」において愛される自己と異なるとしても、それもまた愛される自己であることに変わりはない。しかしそれは挫折した「愛されたい欲求」を自ら満たすという必死の試みであり、「ナルチズムは、比喩的にいえば、心の傷跡であり、心的防衛の結果生じたものである。そしてこの状態において自己充足感または全能感幻想が始まるのである」(土居 1970: 62)⁽⁶⁾。土居は相手あつての「甘え」が持つ傷つきやすさを繰り返し強調する。素直な「甘え」と屈折

(5) つまり、言語化されなくても「甘えたい」「甘えられない」などとして意識された「甘え」は屈折した「甘え」である。

(6) 精神分析の概念である自己愛とナルシズムは、現在同じ意味を持つ言葉として広く一般的に使われているように思われる。このような状況を踏まえれば、土居が両者を区別し「甘え」概念に対応づけたことは確認されるべき点であると筆者は考える。

した「甘え」は発達早期に固定され生涯継続する類型ではない。「甘え」は日常的な対人関係において常に傷つきに晒され屈折する可能性がある。素直な「甘え」は「甘え」を傷つきから保護しその傷を癒やす機能を持つというのが土居の意に即した理解であると筆者は考える。

素直な「甘え」と「自分」

以上、土居「甘え」論の概要を示した。土居に従えば、生得的な対象希求傾向としての「甘え」は相互信頼関係に支えられた素直な「甘え」経験を経て独立した自己を保持する「自分がある」状態へと至る。対して屈折した「甘え」経験は相互信頼を欠いているがゆえに対人関係に囚われた「自分がない」状態の中に「甘え」を留める。ここでは土居が日本における成熟した発達として「自分がある」状態を位置づけたことに注目したい。この土居の主張はロスバウムらが依拠した土居「甘え」論から大きく異なると思われるからである。ロスバウムらに従えば、日本における親密な関係の文化的発達経路は「順応（社会の調和）」を目標とした相互依存的な対人関係の円滑な営み（共生的調和）となる。これは赤ん坊時代に喚起された養育経験に基づく「甘え」関係（統合）をテンプレートとする文化的パターンであり、親密な関係の中で「甘え」を満たし合うことが日本における成熟した発達とされる。これは「自分がない」状態を示唆してはいないだろうか。ただし土居は「日本における成熟した発達は親密な関係の中で甘えることのない「自分」を確立することである」と主張しているのではない。生得的な対象希求傾向に由来する「甘え」欲求は存在し続けるからである。「養育環境に愛情と安全が具わっている限り、甘えが全く満たされないということはない。やがて子供が言語を覚え、はじめは家庭、やがて家庭外の社会にも参加するようになれば、自分というものが自覚される。しかしそうであっても「甘え」の心情が消えてなくなることはないだろう。実際、大人になっても、非言語的なプロセスとしての「甘え」は継続する」（土居 1997: 19-20）。むしろ土居の主張の論点は、赤ん坊時代に素直な「甘え」を経験した人間は「自分」を確立して対人関係を営むことができるようになった後にも親密な関係において素直な「甘え」を経験する可能性がある、ということにある。「初期の母子関係において相互の信頼があれば子供は素直に甘えるし、また子供の頃に素直に甘えていれば、いずれ甘えを卒業して自立への道を歩むことができる。またいったん自立した後も、機会と事情が許せば親しい関係の中で甘えを再び享受することができないわけではない」（土居 2001: 109-110）。

例えば土居（1967b）は1963年のエッセイ「甘えの心理と論理」において甘えることが日本における対人関係の円滑な営みにとって重要であることを「お言葉に甘えて」という表現の中に見る。しかし同時にその「甘え」が信頼の支えを欠いている可能性を指摘する。

「たとえば「お言葉に甘えて」というときの心理を考えてみるがよい。それはたしかに人間関係を円滑にするであろう。それはちょっと人をよい気持ちにさせる。しかし、そこ

には何かよそよそしさがひそんではいないか。意地悪くいえば、「お言葉に甘えて」というときは「あなたの真意の存するところはさておいて」という無意識の了解が存するといっても過言ではない。これは他人同士の関係だからというかもしれない。しかし親しい家族同士のあいだでも甘えがもつばら前景を占めているときは、必ずその背後に信頼の欠如がある、とわれわれ精神科医は判断するのである」(土居 1967b: 182)。

信頼を欠いた「甘え」は、先に「土居「甘え」論の概要」で示した通り、屈折した「甘え」を意味する。つまり土居が「お言葉に甘えて」という表現に見たのは、日本における対人関係の前景が「甘え」によって占められた場合、それが家族のような親密な関係であろうと一般的な対人関係であろうと屈折した「甘え」の満たし合いによって円滑に営まれている可能性である。確かにそれは「ちょっと人をよい気持ちにさせる」かもしれない。しかしそれは相互信頼に支えられた素直な「甘え」の充足とは異なる。それゆえ「落ち着く」ことから得られる「安心感」とも異なる。土居は同じエッセイの中でその当時一般的だった「天下太平の気分」に見られるこのような心の状態が「浅薄で内に空しさを秘めている」と指摘する。

「なるほど彼ら〔お言葉に甘える〕ことで対人関係を円滑に営む人物〕は世の中をたくみに泳ぐ。彼らは人の言葉に甘えるばかりでなく、進んで人にとりいる。彼らはどうすれば、またどこにいけば、自分の甘えを満足させることができるかをよく知っているのだ。彼らはそのための苦勞ならば厭うということはない。現在の日本には、ことにこのような人間が闊歩しているように見受けられる。最近、巷間でうんぬんされる天下太平の気分は、まさにこのような人々が作り出したものなのであろう。

しかし、どうやら人々は、このような天下太平の気分が浅薄で内に空しさを秘めていることを、ぼんやりと気づいているようだ(〔 〕内引用者)」(土居 1967b: 178-179)。

土居のこの指摘は、ロスバウムらが日本における安定したアタッチメント関係であると同時に親密な関係のテンプレートとして位置づけた赤ん坊時代の養育者との「甘え」関係が屈折した甘え合いである可能性を示唆する。土居(2001: 100-102)は屈折した「甘え」の関係性を見守る側と素直に甘える側の相互信頼とは違う「甘やかす」と「甘ったれ」の相互性と呼ぶ。「甘やかす」ことは相手に甘える気持ちを喚起しようとすることであり、そこで生まれる「甘え」は自らの生得的な対象希求傾向に根ざした自然発生的な「甘え」ではなく、「甘やかす」側を喜ばせるために甘えてみせる「甘ったれ」となる。「甘ったれ」は自らの「甘え」で相手を喜ばすことに満足する。しかしそれは「甘やかす」側のための演技なのだから、素直な「甘え」経験がもたらす安心感という本当の満足を得ることはない。「甘やかす」側もそうするのは相手を喜ばすためだと考えている。しかし相手の喜びが自分にとって好都合だから「甘やかす」のであり、その意味で「甘やかす」側は実際には相手に甘えている。ここには「甘やかす」側

は相手に「甘ったれ」を期待し「甘ったれる」側も相手の「甘やかし」を計算に入れて振る舞うという相互性がある。「しかしそれは信頼の相互性とは違う。むしろ狎れ合いと言うべきだろう。というのは、互いに親しむように見えながら実はそれぞれ自分なりの思惑で動いていると考えられるからである」(土居 2001: 101)。2章と3章の整理が示す通り、ロスバウムらは他者(母親)に依存する欲求を赤ん坊に喚起することを日本の養育の文化的特徴として位置づけた。土居(e.g., 1998)は赤ん坊に「甘え」を喚起する「甘やかし」を英語の spoil (スポイル) に対応づける。つまり「甘やかし」は「駄目にする」ことである。「甘やかし」と「甘ったれ」は屈折した甘え合いを通して双方ともに「自分がない」状態の中に留まり続ける。これは見守りと素直な「甘え」の相互信頼を通して「自分がある」状態へ至るとする土居「甘え」発達論とは異なる。

「甘やかし」と「甘ったれ」は親子(家族)に代表される親密な関係の前景が「甘え」によって占められた場合の屈折した「甘え」である。土居(2001: 131-134)は「甘え」が前景を占める一般的な対人関係を「迎合」と呼ぶ。それは「こびる」「おもねる」「へつらう」「とりいる」「すりよる」「ごまをする」「おべっかを言う」「よいしょする」などとして表現される対人関係の持ち方であり、「お世辞を言う」「立てる」「持ち上げる」「おだてる」「同じる」「あわせる」「機嫌を取る」なども迎合に準ずる状況の表現とされる。迎合とは「下手に出て相手の歓心を買うこと」(土居 2001: 131)であり、その目的は「相手に気に入られること」(土居 2001: 131-132)である。例えば上記引用文において「お言葉に甘える」人物が有する対人関係の持ち方ともされている「とりいる」という言葉に関して土居は次のように述べる。「これは大人をすかすときに使う言葉である。日本の社会に情実が多いというのは、容易にとりいることができる人物が多いということであり、言い換えれば、子どものようにすかすことができることなのである」(土居 1967a: 174-175)。「甘やかし」と「甘ったれ」では双方ともに相手の意に適うことが意識されるが、そうすることが自分の利益のためであることは棚上げされた。対して迎合では、「お言葉に甘える」ときのように、自らの思惑が自覚される。この意味で「甘やかし」と「甘ったれ」は無意識の迎合である。

土居が日本における対人関係の文化的パターンを一括して迎合と見なしたのでないことは重要である。土居は日本における対人関係の相互依存的パターンを「協調」と位置づける。そしてそれが「甘え」に基づくものであるとしても「そのことに普遍的価値がないわけではなく、またそれは必ずしも個人を圧殺しその単独行動を禁ずるものでもなかった」(土居 2001: 137)として肯定的に評価する。「日本では昔から和を重んじたし、人格円満で協動的であるというのはほめ言葉であった。「和を以て貴しとす」というように、そのことに最大の価値が置かれていた。人間関係は得てしてぎくしゃくしやすいが、ある約束事のもとに譲るべきものは譲って、人の和を保つことがよいとされたのである」(土居 2001: 136-137)。協調は「自分」を保持する個人による相互依存的な対人関係の営みを意味すると言えるだろう。対して迎合は屈折した「甘え」が前景を占める相互依存関係である。そして問題は「協調が迎合に近いことであ

る。協調だと思っていて、気が付いてみるとそれが単に狎れ合いや迎合であるということがあり得る」(土居 2001: 137)。相互依存的な対人関係の円滑な営みをもたらすのは素直な「甘え」の充足かもしれないし「ちょっと人をよい気持ちにさせる」だけで「浅薄で内に空しさを秘めている」上辺の充足なのかもしれない。言い換えれば、その営みは「甘えからの自由」に支えられているのかもしれないし「甘える自由」を求めているのかもしれない (e.g., 土居 1971)。土居のこの主張は、アタッチメントの安定性と社会化の関係を巡る4章の整理が示す通り、対人関係の円滑な営みから得られる安心感が「感じられない不安」を伴う可能性を想定するアタッチメント理論と類似していると言えるだろう。

以上、本章では土居「甘え」論の概要を示した後にロスバウムらによる土居「甘え」論の捉え方を検討した。その際特に土居が日本における発達の文化的経路として示した道筋に注目した。それは相互信頼関係に支えられた素直な「甘え」経験を経て独立した自己を保持する「自分がある」状態へと至る経路である。これはロスバウムらが土居「甘え」論に依拠して示した道筋とは異なる。ロスバウムらが日本における成熟した発達として示した親密な関係における「甘え」は「自分がない」状態の中での屈折した「甘え」である可能性がある。これはロスバウムらによる土居「甘え」論の捉え方に問題があることを示唆しているように思われる⁽⁷⁾。加えてここでは土居「甘え」論それ自体がアタッチメント理論との親和性を有する可能性を指摘したい。4章の整理が示す通り、アタッチメント理論は、ロスバウムらの文化研究とは異なり、アタッチメントの安定性と社会化を親子関係の二つの異なる構成要素として区別する。そこではアタッチメントを巡る養育者との相互作用に由来するアタッチメントの安定性は社会化を巡る養育者との相互作用を促進する学習バイアスとして機能することが仮定される。土居もまた、あたかも「甘えの素直さ」が「アタッチメントの安定性」を意味するかのように、「甘えられる(素直に甘える)」ことを経験した後に親に「したがう(社会化の相互作用に積極的に参加する)」ことが続くと述べる。

「普通の親子の場合、子どもは親に甘える。つまり甘えを媒介として子どもは人間関係の中に入る。そして親に甘えられるので子どもは親にしたがう。もっともいつも子どもの思うまま甘えられるわけではない。そこで甘えられない分だけ自分勝手に振舞おうとする。それが子どものわがままといわれるものの本質である。通常、全く甘えない子どもはいないように、多少ともわがままをいわない子どももいない。そして甘えたりわがままをいったりしながら、子どもは次第に成長し、最初は家族の一員、ついで学校という社会に組み込まれ、やがては成人して広い社会の中で独り立ちするようになるのである」(土居 1998:

(7) ロスバウムら(Rothbaum, Pott, et al. 2000)は日本の「甘え」関係の特徴としてアメリカにおける言語的コミュニケーションと対比的に非言語的コミュニケーションを位置づける。しかしこの場合の「非言語的」が意味するのは「意識されているが言語化されていない」ことであり、土居が「非反省的かつ非言語的」とした「甘え」の特徴とは異なる。

589-590)。

実際、土居 (e.g., 1989) は自らの「甘え」論とボウルビイのアタッチメント理論の類似性に繰り返し言及している。ただしアタッチメント理論を近づくとする行動に焦点化された理論として捉える土居は、両者の類似点をこの行動特徴に限定する。そして行動だけではなく心理的次元を射程に入れた「甘え」論が有する概念的利点を強調する。確かにアタッチメント理論における「アタッチメント」の意味を生得的な学習バイアスに基づいた文字通り「くつつく」行動に制限するべきとする議論があることは事実である (e.g., Goldberg et al. 1999)。しかし、アタッチメント理論における「アタッチメント」の意味は組織化された行動パターンである安全基地現象及び心の安全基地という概念的枠組みの中で理解されるべきであると筆者は考える。そのときアタッチメント理論の中心は、4章の整理が示す通り、「安心感」という心理的次元によって占められる⁽⁸⁾。恐らく、アタッチメント理論における「アタッチメントの安定性」及び「安心感」と、土居「甘え」論における素直な「甘え」及び「落ち着き (やすらぎ)」の間には、土居が考える以上の類似性があるように思われる。

6. おわりに

本稿では、土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究に注目し、土居「甘え」論の取り扱われ方を検討した。2章と3章では、ロスバウムを主著者とする二つの論文の整理を通して、土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究の特徴を確認した。2章で整理したアタッチメントの安定性を巡る論文は、土居「甘え」論に依拠しながら「甘え」を日本における安定したアタッチメント関係として位置づけ、アタッチメント理論が普遍性を仮定するアタッチメントの安定性を文化構成物として捉え直した。3章で整理した親密な関係を巡る論文は、「甘え」を日本における親密な関係の雛形として位置づけ、親密な関係の生涯発達に関する文化的経路をモデル化した。次に4章では、ロスバウムらの土居「甘え」論に依拠したアタッチメントの文化研究とアタッチメント研究がアタッチメントの安定性と社会化をどのように関係づけているのかに注目し、前者は後者に対する批判として位置づけられることが確認された。そして最後に5章では、土居にとっての「甘え」論という視点からロスバウムらの文化研究を検討した。その結果ロスバウムらによる土居「甘え」論の捉え方には問題があることが指摘された。加えて土居「甘え」論それ自体がアタッチメント理論との親和性を有する可能性も示された。これらの考察はロスバウムらの文化研究がアタッチメント研究に対する批判力を

(8) 安全 (safety) と安心 (security) は概念的に区別されなければならない。安全は「確実な避難所」としての養育者の機能に関係するのに対して、安心が関係する養育者の機能は「安全基地」である。安全は物理的危険の不在として客観的に定義されるのに対して、安心は現実がどうであるかは独立して安全であると感じることつまり「安心感」として主観的に定義される (e.g., Ainsworth 2010: 46)。

有するののかという問題を提起する。しかしこう主張することはロスバウムらの文化研究を否定することを意味するのではない。本稿の考察が示すのはロスバウムらによってモデル化された日本の対人関係の文化的パターンを屈折した「甘え」として捉える視点である⁽⁹⁾。ロスバウムらは土居「甘え」論をアタッチメントの文化研究のモデル・ケースとして位置づけ、アタッチメント理論の普遍妥当性を批判した。対して本稿の考察結果は土居「甘え」論がアタッチメントの文化研究とアタッチメント研究の橋渡しになる可能性を示唆する。

筆者はこの可能性が単なる示唆を超えた現実に取り組む価値のある研究の方向性なのではないかと考える。5章「土居「甘え」論の概要」で指摘した通り、土居は精神分析理論によって「甘え」という日本語を普遍的な概念として捉えた。ただしこれは土居が精神分析の普遍性を自明としたことを意味しない。土居 (e.g., 1990a) は普遍性を標榜する精神分析に西洋由来の文化的バイアスを鋭く認めているからである。しかし土居はそれによって精神分析の普遍性を否定したのではない。逆に日本由来の「甘え」論に対応づけることで精神分析が普遍的である可能性を追求したのである (e.g., 土居 2000, 2004)。土居が精神分析の概念である「アンビバレンス」「自己愛」「ナルシズム」を「甘え」と関連づけたことは5章で示した通りである。あるいは土居 (e.g., 1971, 1975) は素直な「甘え」経験に由来する独立した自己としての「自分」を精神分析家エリクソンの「アイデンティティ」に結びつける。このような土居による精神分析の普遍性との関わり方はアタッチメント理論の普遍性を批判するために「甘え」に依拠したロスバウムらとは対照的である。筆者はロスバウムらがアタッチメント理論の普遍性に囚われ過ぎていたような印象を持つ。ロスバウムら (Rothbaum, Weisz, et al. 2000: 1102) が、アタッチメント理論を肯定的に評価する一方で、そこから西洋由来の文化的バイアスが取り除かれた後に残る普遍性は接近や保護を求めることなど幾つかの抽象的原理だけであろうと主張するのは、この現れであるように思われる。対して土居は、「甘え」を使って精神分析の普遍性を追求すると同時に、あるいはそうしたからこそ、現実の多様な現象を「甘え」で捉えた (あるいは土居の好んだ表現を使うならば「切った」)。それはあたかも精神分析を安全基地としながら「甘え」と共に現実を探索しているかのようである。同じ関わり方をアタッチメント理論との間で営むことはできないだろうか。5章「素直な「甘え」と「自分」」で指摘した通り、アタッチメント理論と土居「甘え」論には、「くつつく」という行動特徴に加えて、前者における「アタッチメントの安定性」及び「安心感」と後者における素直な「甘え」及び「落ち着き (やすらぎ)」

(9) 土居 (e.g., 1963) はロスバウムらと同じく養育文化が子どもの発達に及ぼす影響を重視する。そして、日本では、赤ん坊の自律性が前提とされる西洋とは対照的に、赤ん坊が無力で頼りない存在として想定されていることに注目し、このような子ども観が養育実践を通して子どもに影響を及ぼしている可能性を指摘する。更に日本では「無力で頼りなく愛されたい欲求を有する」ことが赤ん坊の特徴とされるだけでなく人間存在の基本的事実とされていることにも注意を促している。しかし土居が想定する日本における発達経路の目標は、他者に依存する「自分がない」状態ではなく、それを超えた独立した自己を保持する「自分がある」状態である。

の間に類似が認められる。ロスバウムら (e.g., Rothbaum et al. 2011: 174) にとって例えばこのような類似はアタッチメント理論の普遍性を批判する証拠となるだろう。しかし土居ならばアタッチメント理論が普遍的である可能性を示唆する証拠として捉えるのではないだろうか。もちろんこれは筆者の想像に過ぎない。しかしこの類似をそのように捉える場合、土居「甘え」論はアタッチメント理論の普遍性に依拠したアタッチメントの文化研究のモデル・ケースになりうるのではないかと筆者は考える。

文献表

Ainsworth, M. D. S.

- 1990 "Some Considerations Regarding Theory and Assessment Relevant to Attachments beyond Infancy," In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, & E. M. Cummings (eds.), *Attachment in the Preschool Years: Theory, Research, and Intervention*, pp. 463-488. Chicago, IL, US: University of Chicago Press.
- 1991 "Attachments and Other Affectional Bonds across the Life Cycle," In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (eds.), *Attachment across the Life Cycle*, pp. 33-51, London: Routledge.
- 2010 "Security and Attachment," In R. Volpe (ed.), *The Secure Child: Timeless Lessons in Parenting and Childhood Education*, pp. 43-53, Charlotte, N.C.: Information Age Pub.

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S.

- 1978 *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. Hillsdale NJ: Lawrence Erlbaum.

Behrens, K. Y.

- 2004 "A Multifaceted View of the Concept of Amae: Reconsidering the Indigenous Japanese Concept of Relatedness," *Human Development* 47-1: 1-27.
- 2016 "Reconsidering Attachment in Context of Culture: Review of Attachment Studies in Japan," *Online Readings in Psychology and Culture* 6-1.

ボウルビィ、ジョン

- 1991 (1982) 『母子関係の理論 I 愛着行動』(新版)、黒田実郎ほか訳、岩崎学術出版社。
- 1993 (1988) 『母と子のアタッチメント—心の安全基地』、二木武監訳、医歯薬出版。

土居 健郎 (Doi, T)

- 1958 「神経質の精神病理——特にとらわれの精神力学について」『精神神経学雑誌』第60巻: 733-744。
- 1960a 「〈自分〉と〈甘え〉の精神病理」『精神神経学雑誌』第62巻: 149-162。
- 1960b 「ナルチシズムの理論と自己の表象」『精神分析研究』第7巻2号: 7-9。
- 1961 『精神療法と精神分析』、金子書房。
- 1963 "Some Thoughts on Helplessness and the Desire to Be Loved," *Psychiatry* 26-3: 266-272.
- 1965 『精神分析と精神病理』、医学書院。
- 1967a (1957) 「再び「甘える」について」『精神分析』、pp. 172-175、創元社。
- 1967b (1963) 「甘えの心理と論理」『精神分析』、pp. 177-183、創元社。
- 1970 『精神分析と精神病理 (第2版)』、医学書院。
- 1971 『「甘え」の構造』、弘文堂。
- 1975 「『「甘え」の構造』補遺」荻野恒一・相葉均・南博 (編) 『臨床社会心理学の基礎 (第5巻)』、pp. 203-

- 218、誠信書房。
- 1989 “The Concept of *Amae* and Its Psychoanalytic Implications,” *International Review of Psycho-Analysis* 16: 349–354.
- 1990a “The Cultural Assumption of Psychoanalysis,” In J. W. Stigler, R. A. Shweder, & G. Herdt (eds.), *Cultural Psychology: Essays on Comparative Human Development*, pp. 446–453, Cambridge: Cambridge University Press.
- 1990b 「「甘え」と「やすらぎ」」『月刊PHP』6月号: 38–42。
- 1992 “On the Concept of *Amae*,” *Infant Mental Health Journal* 13(1): 7–11.
- 1993 “*Amae* and Transference Love,” In E. S. Person, A. Hagelin, & P. Fonagy (eds.), *On Freud's "Observations on Transference-Love"*, New Haven: Yale University Press.
- 1997 『聖書と「甘え」』、PHP研究所。
- 1998 「「甘え」と「妬み」」『児童心理』第52巻7号: 1–11。
- 1999 「「甘え」概念についての若干の考察」北山修(編)『「甘え」について考える』、pp.213–217、星和書店。
- 2000 「漱石と精神分析」『精神分析研究』第44巻3号: 235–238。
- 2001 『続「甘え」の構造』、弘文堂。
- 2002 「日本起源の概念は通用するか」『精神神経学雑誌』第104巻11号: 1017–1023。
- 2004 「精神分析と文化の関連をめぐって」『精神分析研究』第48巻増刊号: 85–93。
- Gjerde, P. F.
2001 “Attachment, Culture, and *Amae*,” *American Psychologist* 56–10: 826–827.
- Goldberg, S., Grusec, J. E., & Jenkins, J. M.
1999 “Confidence in Protection: Arguments for a Narrow Definition of Attachment,” *Journal of Family Psychology* 13–4: 475–483.
- Hinde, R. A.
1976 “On Describing Relationships,” *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 17–1: 1–19.
- Keller, H.
2007 *Cultures of Infancy*. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Keller, H., & Bard, K. A. (eds.)
2017 *The Cultural Nature of Attachment: Contextualizing Relationships and Development*. Cambridge: MIT Press.
- Kondo-Ikemura, K.
2001 “Insufficient Evidence,” *American Psychologist* 56–10: 825–826.
- LeVine, R. A., & LeVine, S.
2016 *Do Parents Matter? : Why Japanese Babies Sleep Well, Mexican Siblings Don't Fight, and American Parents Should Just Relax*. New York: PublicAffairs.
- Main, M.
1990 “Cross-Cultural Studies of Attachment Organization: Recent Studies, Changing Methodologies, and the Concept of Conditional Strategies,” *Human Development* 33–1: 48–61.
- Mesman, J., Van IJzendoorn, M. H., & Sagi-Schwartz, A.
2016 “Cross-Cultural Patterns of Attachment: Universal and Contextual Dimensions,” In J. Cassidy & P. R. Shaver (eds.), *Handbook of Attachment, 3rd Edition*, pp. 852–877, New York: Guilford Press.

Morelli, G., & Rothbaum, F.

2007 "Situating the Child in Context: Attachment Relationships and Self-Regulation in Different Cultures," In S. Kitayama & D. Cohen (eds.), *Handbook of Cultural Psychology*, pp. 500-527, New York: Guilford Press.

Otto, H., & Keller, H. (eds.)

2014 *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*. Cambridge: Cambridge University Press.

Posada, G., & Jacobs, A.

2001 "Child-Mother Attachment Relationships and Culture," *American Psychologist* 56-10: 821-822.

Quinn, N., & Mageo, J. M. (eds.)

2013 *Attachment Reconsidered: Cultural Perspectives on a Western Theory*. New York: Palgrave Macmillan.

Richters, J. E., & Waters, E.

1991 "Attachment and Socialization," In M. Lewis & S. Feinman (eds.), *Social Influences and Socialization in Infancy*, pp. 185-213, New York: Plenum Press.

Rothbaum, F., & Kakinuma, M.

2004 "Amae and Attachment: Security in Cultural Context," *Human Development* 47-1: 34-39.

Rothbaum, F., Kakinuma, M., Nagaoka, R., & Azuma, H.

2007 "Attachment and Amai: Parent-Child Closeness in the United States and Japan," *Journal of Cross-Cultural Psychology* 38-4: 465-486.

Rothbaum, F., & Morelli, G.

2005 "Attachment and Culture: Bridging Relativism and Universalism," In W. Friedlmeier, P. Chakkarath, & B. Schwarz (eds.), *Culture and Human Development: The Importance of Cross-Cultural Research for the Social Sciences*, pp. 99-123, New York: Psychology Press.

Rothbaum, F., Morelli, G., & Rusk, N.

2011 "Attachment, Learning, and Coping: The Interplay of Cultural Similarities and Differences," In M. J. Gelfand, C.-y. Chiu, & Y.-y. Hong (eds.), *Advances in Culture and Psychology: Vol. 1. Advances in Culture and Psychology*, pp. 153-215, New York: Oxford University Press.

Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J.

2000 "The Development of Close Relationships in Japan and the United States: Paths of Symbiotic Harmony and Generative Tension," *Child Development* 71-5: 1121-1142.

Rothbaum, F., & Trommsdorff, G.

2007 "Do Roots and Wings Complement or Oppose One Another? : The Socialization of Relatedness and Autonomy in Cultural Context," In J. E. Grusec & P. Hastings (eds.), *The Handbook of Socialization*, pp. 461-489, New York: Guilford Press.

Rothbaum, F., Weisz, J., Pott, M., Miyake, K., & Morelli, G.

2000 "Attachment and Culture: Security in the United States and Japan," *American Psychologist* 55-10: 1093-1104.

2001 "Deeper Into Attachment and Culture," *American Psychologist* 56-10: 827-829.

杉尾 浩規

2018 「アタッチメントの文化的性質——アタッチメントの文化研究の動向と展望」『社会と倫理』第33号: 135-160。

Tobin, J.

- 2000 "Using 'the Japanese Problem' as a Corrective to the Ethnocentricity of Western Theory," *Child Development* 71-5: 1155-1158.

van IJzendoorn, M. H., & Sagi-Schwartz, A.

- 1999 "Cross-Cultural Patterns of Attachment: Universal and Contextual Dimensions," In J. Cassidy & P. R. Shaver (eds.), *Handbook of Attachment, 1st Edition*, pp. 713-734, New York: Guilford Press.
- 2008 "Cross-Cultural Patterns of Attachment: Universal and Contextual Dimensions," In J. Cassidy & P. R. Shaver (eds.), *Handbook of Attachment, 2nd Edition*, pp. 880-905, New York: Guilford Press.

Waters, E., & Cummings, E.

- 2000 "A Secure Base from Which to Explore Close Relationships," *Child Development* 71-1: 164-172.

Waters, E., Hay, D., & Richters, J.

- 1986 "Infant-Parent Attachment and the Origins of Prosocial and Antisocial Behavior," In D. Olweus, J. Block, & M. Radke-Yarrow (eds.), *Development of Antisocial and Prosocial Behavior*, pp. 97-125, New York: Academic Press.

Waters, E., Kondo-Ikemura, K., Posada, G., & Richters, J. E.

- 1991 "Learning to Love," In M. Gunner & L. A. Sroufe(eds.), *The Minnesota Symposia on Child Psychology(Vol. 23)*, pp. 217-255, Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Yamaguchi, S.

- 2004 "Further Clarifications of the Concept of Amae in Relation to Dependence and Attachment," *Human Development* 47-1: 28-33.